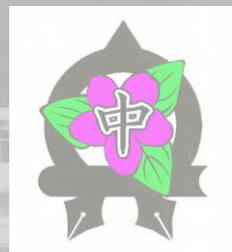


協働



ウィークポイントはストロングポイントを育てる源

校長 西村 元一

今年度も残すところあとわずかとなりました。皆様には、1年間を通して本校の教育に御理解・御協力を賜りました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

さて、誰にも苦手とするものがありますが、それは人を成長させる原動力でもあると思います。

サッカー東京都選抜3年生チームのコーチを務めていたとき、中村憲剛という中学生がチームに入ってきました。J1の川崎フロンターレの全盛期を支え、南アフリカワールドカップの日本代表にも選ばれていた、中村選手の中学生時代です。技術と戦術眼にたけ、東京選抜のチームでは彼がゲームに出ると、パスがつながり、攻撃のリズムがよくなりました。しかし、体格的には中学2年生並みで、スピードやフィジカル面でも他の選手に劣っていたため、選抜チームではレギュラーではありませんでした。その彼が、日本を代表する選手を経て、現在はサッカー番組の解説者として活躍しています。

サッカーで守備が嫌がるプレーは、フィジカルを生かした強引な突破、スピードを生かして守備ラインの裏でパスを受けて一気にチャンスを作り出すプレー、守備の穴を突くスピード豊かなキラーパスなどです。当時の中村選手は、これらのプレーに必要な体格もスピードもキック力もありませんでした。

彼は、そのハンディキャップを最小限に抑えるために、フリーでボールを受ける工夫や相手の足が届かない所にボールをコントロールする技術、そして相手にあたられる前に自分より有利な味方にパスを出す戦術眼などを磨いていたように思います。それが、体格・スピード・フィジカルというどうしようもない面を補うために残された、唯一の道だったのです。中学時代に磨いた技術と戦術眼が、高校・大学へと進むにつれて身長が伸び、他の選手並みのパワーを身に付けたときに、日本を代表するミッドフィルダーとしての大きな花を咲かせたのです。

誰でも苦手な面をもっていますが、それを克服しようとするところで、その人のよさに磨きをかけることができます。ウィークポイントはストロングポイントを育てる原動力でもあるのです。他の人より劣る部分があっても、下を向く必要はありません。生徒の皆さんには、ウィークポイントを糧に自分を磨き、前に歩を進めてほしいと思います。無駄な努力など、一つもありません。